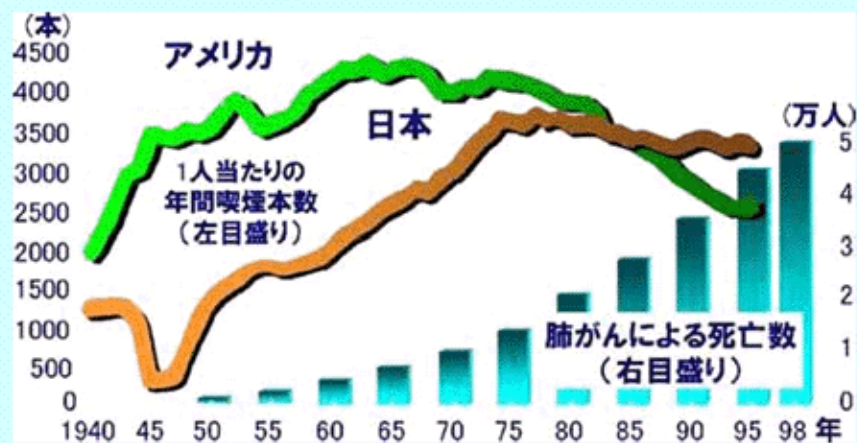


喫煙の流行と健康被害

— 18歳以上1人当たり年間喫煙本数と日本の肺がんによる死亡数の推移 —

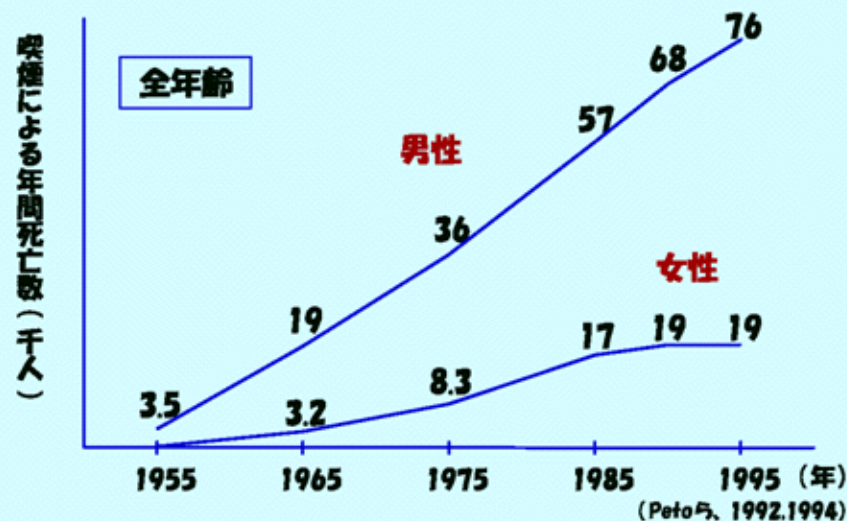


© 厚生労働科学・中村重 2002

喫煙の流行と健康被害

- アメリカやイギリスなどの欧米先進国では、わが国に比べて喫煙が早くから流行したが、1960年代頃から国家的にタバコ対策を推進したため、現在では18歳以上の一人当たりのタバコの消費量も下がり、その結果、喫煙関連疾患も減少傾向にある。
- 一方わが国では、タバコの消費量は戦後の経済成長とともに増加し、本格的な喫煙の流行期に入ったのは欧米から約30年遅れた1970年代である。
- 健康被害は喫煙の流行から約30年遅れて顕著になるといわれている。
- 日本では1950年には年間1000人であった肺がん死亡数が、1990年代後半には5万人と約50倍も増加し、1998年には男女合わせて肺がん死亡数が胃がんを追い抜いて、がんのトップになった。
- このように、わが国は現在、喫煙による健康被害が深刻化しており、今後人口の高齢化とあいまって、さらに健康被害が拡大することが予想される。

日本における喫煙を原因とする年間死亡数



© 厚生労働科学・中村重 2002

わが国における喫煙を原因とする年間死亡者数

- わが国において、喫煙が原因で死亡したと疫学的に推定される数(喫煙による超過死亡数)は1995年現在、男性7万6千人、女性1万9千人、合計9万5千人である。
- これは交通事故による年間死亡者数(約1万人)の約10倍に相当する。
- 欧米における喫煙による超過死亡数は、国家的なタバコ対策が功を奏し増加傾向に歯止めがかかるか、もしくは減少傾向に転じている。
- 一方、わが国では最近30年間、18歳以上の1人当たりのタバコ消費量が横ばい状態で推移していることから、今後高齢化とともに、喫煙による超過死亡数はさらに増加するものと予想される。

注) 2000年現在、喫煙による超過死亡数は、11.4万人と推計されており、総死亡(96.1万人)の12%を占めている。